

季報

二松學舎大学附属図書館 Quarterly Report

- P2 二松學舎大学附属図書館資料センター開設 / 図書館の現状と課題 (3) 土屋 茂
- P3 中国文学が外国文学であるという当たり前の事実 伊藤晋太郎
- P4 なぜ私は欧州の国際政治を研究するのか 合六 強
- P5 アメリカ図書館事情報告 (1) ニューオリンズ編 山崎 和正
- P6 どんどん使おう! プレゼンテーションルーム
- P7 本学所蔵資料紹介 / 新着図書 おススメの1冊
- P8 本学教職員著書紹介

No.103

2018(平成30)年11月

二松學舎大学附属図書館資料センター開設

平成30年10月1日、柏キャンパスを拠点として二松學舎大学附属図書館資料センターを開設しました。

本学では、近年、横溝正史旧蔵資料や夏目漱石自筆資料を基に、研究成果を公開することにより多くの注目を集めてきました。社会に知られていない貴重な資料は学問的意義を持ち、優れた研究成果となりうることは言うまでもありません。収集した資料の公表によりマスコミや社会に向けて情報を発信することで、多くの方々に知りえることとなります。そのため、近年、資料の寄贈や寄託の申し出が続いています。最近では、創立者三島中洲と親交の深かった進鴻溪、本学専門学校初代校長の山田準、短歌結社『潮音』の歌人の太田青丘等の貴重な資料の寄贈を受けています。そして代替えのきかない真筆資料は文化財でもあります。この資料センターには保管スペースのみならず、本学研究者の作業スペースを設けております。研究発表の発信基地として、本学の資料を活用することによって積極的に社会貢献を行ってまいります。

図書館の現状と課題（3）

附属図書館長 土屋 茂
国際政治経済学部国際政治経済学科 教授

「季報」100号・101号の「現状と課題（1）（2）」を要約すると、収容スペースが不足している現状に対し、改善策として、長期的には九段キャンパスに「図書館棟」の建設を、短期的には「柏キャンパスの有効利用」を提案した。図書は毎年5,000冊程度増加する。さらに文学部における「都市文化デザイン学科」の新設及び国際政治経済学部における「国際経営学科」の新設に伴う必要な図書類の購入による増加分をどのように処置するか、特別に配慮しなければならない。それは九段図書館から柏図書館へ書籍を移動し、九段図書館内にスペースを確保することになる。また法人関係の貴重資料については保管場所はほぼ満杯のため、新しく資料を購入するためには柏キャンパスへの移動を考えなければならない。そのために、柏キャンパス内に24時間対応の温度・湿度管理のできる施設でかつ防火・防犯対策のある建物・部屋が必要となる。

これらの状況を改善するため、柏キャンパスの柏5号館1階（元学食）にその空間が確保された。両学部・法人の了解のもと、2018年10月に「二松學舎大学附属図書館資料センター」が設置された。図

書館関係の書籍の保管と寄託・寄贈される予定の資料の保管・研究することのできるスペースである。柏1号館2階にあった図書館所蔵の書籍等や柏2号館4階にあった寄託資料も移動された。この設置により5～6年間は収容スペースが確保されたことになった。ただ、貴重資料・文献等を収容するには不十分である。

柏2号館と高校校舎の間にある「図書館柏保存書庫（プレハブ）」内には、学術雑誌・図書館発行図録のほか、寄贈資料、法人関係資料等々が配架されており、これらの劣化が心配される。さらに、図書館が管理している良いのかが再検討されなければならない。また設備として、24時間対応の温度管理・湿度管理が望まれる。

図書館の組織として、館長のもと、「図書委員会」のほか「大学資料展示室運営委員会」や「横溝正史旧蔵資料運営委員会」がある。図書館の本来の業務・人員の関係からすると、「大学資料展示室運営委員会」は図書館から分離して、法人直属の組織とし、専任の職員を配置すべきではなかろうか。

現状と課題は、今回で終了とする。

中国文学が外国文学であるという当たり前の事実

文学部中国文学科 教授 伊藤晋太郎

中国に興味を持つきっかけになったのが三国志であることはこれまでもあちこちで話してきた。しかし、どうしてそれが三国志だったのかということについては、あまり語ったことがない。

私が初めて三国志を知った80年代中頃、世間はまだ忍者ブームの余韻を引きずっていた。藤子不二雄^④の『忍者ハットリくん』やショー・コスギのアメリカでの活躍がブームの火付け役であろうが、小学生だった私も忍者に心を奪われた一人であった。たまたま母親の実家で眠っていた白土三平の忍者漫画を見つけると、少し大人向けのその忍者の世界に熱中し、日本の戦国時代から江戸時代にかけての歴史にも興味を抱くようになった。

そんな中で三国志に出会った。スムーズに三国志の世界に入っていたのは日本の戦国時代と通じる部分が多かったゆえであることは間違いない。武将の勇猛ぶりや忠義の思想に対するなじみやすさは、国の違いを意識させなかった。つまり、外国のものであることを意識しないままにその世界にのめり込んでいったことになる。これこそ中国の古典に向かい合う時に日本人が陥りやすい罠である。

外国のものであることを意識せずに外国の古典を学ぶということは、どう考えても奇妙なことだが、中学・高校での漢文の授業はその奇妙さを忘れさせる。もちろん、孔子や李白が日本人ではなく中国人であり、『史記』に描かれることが日本の歴史ではなく中国の歴史であることは自明であり、頭ではよく理解しているつもりでも、中国語を日本語に直して読む訓読という行為は、どうしても外国のものを読んでいるという感覚を薄れさせる。

その事実を突きつけられたのが大学で中国文学を専攻した時であった。私が学んだ大学では、『論語』も唐詩も全て中国語で発音し、訓読はあくまでも補助的手段でしかなかった。この時、初めて中国文学が外国文学であるという当たり前のことを頭ではなく実感として思い知らされた。そこから中国の

文学・思想・文化、および中国語に対する態度を改めた。外国のものを学んでいく覚悟ができたともいえる。そして、その効用として、今まで全く興味がなかった現代中国を古代中国（中国ではアヘン戦争以前は全て「古代」とする）と結びつけて捉えられるようになった（これも当たり前のことのように思えるが、各種調査に示されるように、実は多くの日本人は古代中国と現代中国を連続したものとして捉える感覚に乏しい）。

今回、本稿に求められたテーマは、なぜ自国ではなく異国を研究対象としたのか、どのような点に魅かれたのか、ということであったが、上述のように、そもそも最初は異国であるという意識がなかった。だから、気がついたら異国の古典に興味を持ち、専攻していたというのが正直なところである。

ただ、大学に入る前の私が持っていたような感覚はおそらく特殊ではない。何年か前に本学で某学会が開いた漢文教育の起死回生を考えるシンポジウムで、本学卒業の元高校教員は、漢文教科書には原文は不要で書き下し文さえあればよく、「漢文は日本語です！」と声高にのたまわった。もちろん漢文教育であるから中国語直読はあり得ないにしても、漢文を頭から日本のものとして教えられては、中国古典を外国のものとして捉える感覚は育つまい。ここに日本人の奇妙な中国観の根の深さの一端が表れている（断っておくが、私は訓読廃止論者ではない。「武器」としての訓読の効用については経験も交えて述べたい所もあるが、紙幅も尽きかけているからここでは控えておく）。

幸い本学には、訓読を鍛えると共に、中国語力も身につけられるカリキュラムが整っている。中国の文学・思想・文化を本来そうあるべき外国のものとして学べる環境が用意されている。内向きにならず、ワールドワイドに羽ばたいていく人材を育てていきたい。

なぜ私は欧州の国際政治を研究するのか

国際政治経済学部国際政治経済学科 専任講師 合六 強

私の専門分野は国際政治学で、特に欧州の国際政治・安全保障問題を研究しています。これまでは、冷戦期ヨーロッパの安全保障問題を米欧関係(同盟)の視点から研究し、最近では、2014年に起こったウクライナ危機以降のNATO＝ロシア関係に関心を持っています。

これまでも、なぜ日本人なのに欧州の国際政治や米欧関係について研究しているのか、と聞かれることがしばしばありました。確かに日本では、日本外交や日米同盟、アジア太平洋の国際政治を専門にする研究者に比べて、上記のテーマを研究している人は必ずしも多くありません。

そもそも米欧関係について関心をもったきっかけについて話したいと思います。私の場合、家族旅行で海外に訪れる機会があり、小さいころから洋楽や外国のテレビ番組・映画に自然と興味を持ち始めました(これは今もです!)。そのようななか高校生の時にアメリカで3週間ほどホームステイする機会を得ました。日本に帰国してまもない頃、「アメリカ同時多発テロ(9.11テロ)」が発生します。我々世代にとってこの衝撃は大きく、また個人的にもホームステイ先の家族がその後のイラク戦争に派遣されたりと、国際問題が他人事ではなくなったのです。そして大学に入る直前に起こったイラク戦争の開戦をめぐって、米欧が激しく対立する一方、日本がアメリカを支持するのを見て、なぜ同じアメリカの同盟国の間でこんなに対応が違うのだろうという漠然とした問題意識が芽生えました。

大学では、主に国際政治を学ぶとともに、語学についても様々な形で取り組みました。そしてフランスに留学。絶えず戦争の舞台となってきたヨーロッパが、なぜ第二次世界大戦後には安定したのか。また、日本と同様にアメリカの同盟国である欧州諸国は、アメリカとどういう付き合いをしているのか。そして日本も大きな利益を得てきた戦後の国際秩序を米欧諸国はいかにして作り上げてきたのか。こういった問題関心から、フランスで学び、その後、大学院に進学し、現在に到るまで研究を行なっています。

確かに、日本人が外国の政治や外交について研究することに意味はあるのか、ということはよく聞かれますし、私自身も繰り返し自問自答してきました。語学や史資料へのアクセスという面で圧倒的に

現地研究者のほうが有利であることは確かです。それでも、日本(人)の視点から見たときに、同じテーマでも彼らとは違うように見えるということがあります。彼らにとって常識となっている前提が、日本の事例と比較した時、必ずしもそれが自明でない場合があります。そうしたなかで外国を対象とした研究であっても、日本人研究者として新たな意義を見いだせると考えています。

また、そもそもそのテーマに興味をもってしまつたら仕方がないという部分もあります。奨学金や研究費を得るために「研究の意義」というものを打ち出しますが、結局のところそのテーマについて「もっと知りたい」「なぜそうなっているのか」という好奇心がなければ研究は続けられません。それが、自分の経験上、外国の政治や外交の問題に向いただけであって、その対象はなんでも良いと思います。そして私の場合は、海外に旅行したり、住んだりした経験が新しい問題意識を生み出し、新たな研究テーマの発見につながっています。3年前、期せずしてウクライナに住むことになりました。それ以来、現在の欧州の安全保障、特にNATOとロシアの関係についても研究しています。「なぜこういうことが起きているのか」という湧き上がってきた疑問をそのままにせず、自分なりの答えを求めて調べてみる。特に外国研究では、いまの日本の常識では理解できないようなことに度々直面します。調べれば調べるほど、またわからないことがでてくる。だからまた調べる。この繰り返しが研究であり、そのプロセスで知的に楽しむことがその醍醐味だと思います。



【旧ソ連の核兵器が配備されていたウクライナの基地(現在ミュージアム)にて】

2018年6月23日(土)～30日(土)の8日間、アメリカニューオリンズとヒューストンを訪れ、大学図書館5館、公共図書館3館及びALA(American Library Association)の年次総会(日本の図書館総合展に相当)を視察しました。今号ではニューオリンズにおける図書館の現状を紹介します。

■ロヨラ大学ニューオリンズ校 (J.Edgar&Louise S.Monroe Library)



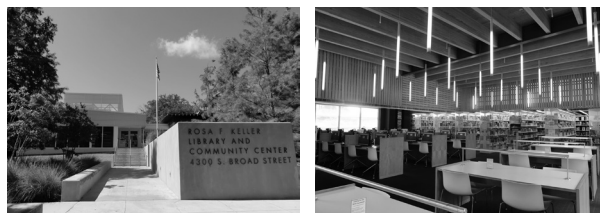
ロヨラ大学は、教員1人当たりの平均学生数が10人という、少人数教育を行っている。リテラシー教育では、必修の初年次ゼミナールの半分をライブラリアンが担当し、学期末に試験を実施して今後の改善に反映させている。また、最近導入したばかりの「Solstice wireless」というアプリがインストールされているパソコン教室では、各端末の画面を全員で共有することができ、双方向の授業を実施している。また、教室内2箇所のカメラを使って、授業内容を遠隔にも配信することができ、オフキャンパスでの新たな教育の可能性を伺わせる。

■テュレーン大学 (Howard-Tilton Memorial Library)



ジャズコレクション、ラフカディオ・ハーンコレクション、ラテンアメリカンコレクションといった特殊コレクションが充実している。なかでもラテンアメリカンコレクションは世界的にも有名で、言語に関わらずラテンアメリカに関する資料を網羅的に収集している。図書館資料は電子媒体が全体の70%を占めており、選書はライブラリアンと学部の教員が協同して行っている。

■ Rosa F.Keller Library&Community Center



2005年のハリケーン・カトリーナによって2メートルの浸水被害を受け、1万冊以上の蔵書が損失した。被災当初、市は建物を全て取り壊して公園にする計画を立てたが、住民の反対によって覆され、基金を創設して2012年5月に現在の図書館が完成した。2017年に米国建築家協会・米国図書館協会主催の図書館建築家賞を受賞している。

■ New Orleans Public Library (Main Library)



「Louisiana Division/City Archives」はルイジアナ300年の歴史の保管庫であり、Family history調査のために利用する人が多く訪れる。また、6月19日に米国大手家電量販店のBest Buyが10代向けのIT教育を目的に作った「Teen Tech Center」がオープンしたばかりで、「失敗を恐れない」をモットーに、自らコンテンツを作成する子供たちを支援している。

■ ALA 年次総会



600を超える企業や団体が出展していた。一例として、自動貸出機は約3,500冊を収納でき、24時間受け取ることが可能である。また、Googleも出展しており、教員向けのプログラミング教育方法を教材として開発したものが展示されていた。アメリカの図書館が、ITリテラシー教育に注力していることを伺わせる一例であった。

次号では、ヒューストン編を掲載します。



どんどん使おう！ プレゼンテーションルーム



ラーニング・コモンズ2階のプレゼンテーションルーム内にはいろいろな機器が揃っています。積極的に活用してゼミナール発表やグループ学習にお役立てください！

今号では、**電子黒板**の便利な使い方をご紹介します！

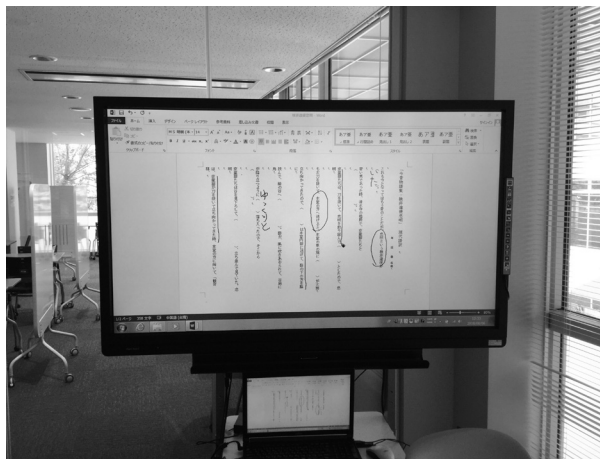
◆パソコン画面の拡大・書き込みができる！◆

電子黒板はホワイトボードとして利用できますが、さらに効果的な利用法があります。それは、パソコンで作った資料を映し、その映した画面に書き込みを加えて利用する方法です。

例えば、教育実習等で使用する資料を Word や Excel、PowerPoint で作成後、USB メモリに保存し、電子黒板に備え付けのパソコンからファイルを開きます。すると、作成した文書が電子黒板に拡大表示され、参加メンバー全員で見られるようになります。また、電子ペンを使って表示された画面に直接書き込むことが可能です。重要箇所をペンで色分けしたり、線や枠を書き込んだりするなどして、話し合いを行えます。その上、下図のように書き込みを加えた画面をそのまま USB メモリに保存することができます。その保存した資料を基にして、教育実習資料を充実したものに作り変えることができ、大変役立ちます。このように、大変便利な機能がある電子黒板を是非ご活用ください！



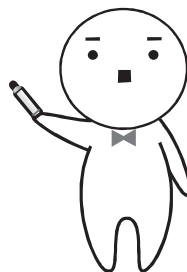
電子ペンで書き込みができる！



プレゼンテーションルーム後方に設置

<例>

年齢(5歳階級)、男女別人口 Population Estimates by Age (5-Year Age Group) and Sex												
平成29年9月1日現在(推定値) Sept. 1, 2016 (Provisional estimates)												
平成29年4月1日現在(人口推定を基とする確定値) April 1, 2016 (Final estimates)												
年齢階級 Age groups	総人口 Total population			総人口 Total population			日本人人口 Japanese population			日本人人口 Japanese population		
	男女計 Both sexes	男 Male	女 Female	男女計 Both sexes	男 Male	女 Female	男女計 Both sexes	男 Male	女 Female	男女計 Both sexes	男 Male	女 Female
	人口(千人) Population (Ten thousand persons)			人口(千人) Population (Ten thousand persons)			人口(千人) Population (Ten thousand persons)			人口(千人) Population (Ten thousand persons)		
総数 Total	12882	6173	6518	126,891	61,764	65,226	125,297	60,917	64,280			
13 0～4歳 years old	519	294	251	5,173	2,653	2,520	6,109	2,820	2,419			
14 5～9	551	272	259	5,318	2,723	2,595	5,270	2,692	2,572			
15 10～14	552	282	268	5,556	2,646	2,710	5,512	2,323	2,619			
16 15～19	597	306	281	5,982	3,089	2,893	6,001	3,022	2,979			
17 20～24	615	323	303	6,250	3,231	3,020	6,094	3,073	2,914			
18 25～29	642	330	312	6,469	3,322	3,146	6,219	3,155	3,054			
19 30～34	709	366	354	7,283	3,656	3,627	7,072	3,601	3,472			
20 35～39	807	409	398	8,200	4,155	4,045	8,036	4,054	3,952			
21 40～44	899	440	478	9,752	4,806	4,916	9,607	4,878	4,729			
22 45～49	929	464	456	9,909	4,838	4,921	9,724	4,826	4,733			

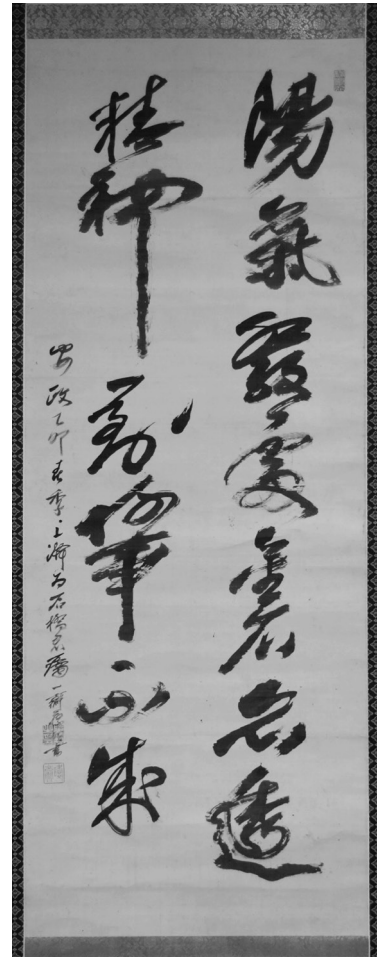


その他にも、上述した備え付けのパソコンでインターネットを立ち上げ、大画面でデジタル資料を検索・閲覧することも可能です。メンバー全員で意見を交換しながら読むことができ、議論が活発になること請け合いです！

プレゼンテーションルームの利用申込はラーニング・コモンズ1階受付までお越しください。

本学所蔵資料紹介

佐藤一斎 書幅 安政乙卯（二）年



（寄贈 国際政治経済学部 長谷川日出世教授）

陽氣發處金石亦透
精神一到何事不成

陽氣の發する處、金石も亦透る
精神一到何事か成らざらん

陽の気が発動するところでは、金や石も突き通してしまふ。
精神を集中して行なえば、どんなことでも成し遂げることができる。

『朱子語類』・卷八

佐藤一斎 一七七一—一八五九

江戸時代、美濃（岐阜県）の人。幕末の大儒。名は坦、号は一斎。天保十二（一八四一）年幕府の儒官に抜擢され、昌平黌で教授した。二松學舎の学風を特徴づける陽明学の起源は一斎に遡る。「陽朱陰王」と呼ばれる一斎の学問は、陽明学に限らず諸学に及ぶもので、その師承や交流も広がった。本学創立者三島中洲の師である山田方谷、斎藤拙堂も門人で、安井息軒、塩谷岩陰、芳野金陵、佐久間象山、横井小楠など幕末に学問界だけでなく、政治に深く関わりがあった人物も多く学んでいる。

〔三島中洲と近代其五〕より一部引用

新着図書 おすすめの1冊

バラク・クシュナー著 幾島幸子訳 『ラーメンの歴史学—ホットな国民食からクールな世界食へ』
明石書店 2018年6月 [請求記号] 383.81-KB

この本は、イギリスケンブリッジ大学で教鞭を執っている著者が、日本近現代史を理解するために「ラーメンの歴史」をその手段として研究した成果をまとめたものです。「訳者あとがき」によると、原題は『Slurp! A Social and Culinary History of Ramen — Japan's Favorite Noodle Soup (ズルズル! 日本が愛する汁麺「ラーメン」の社会・食物史)』（Global Oriental, 2012）というものであり、これを全訳したものがこの本です。

本書はそのタイトルにあるように、ラーメンの歴史を述べています。それは紀元前の中国で麺の原型ができたところから始まり、そして徐々にラーメンが出来上がっていく過程を述べているわけですが、その背景にある文学・歴史・文化など著者の幅広い見識を味わうことができる本です。特に前半部分においては、その背景に対する説明が詳しく、ラーメンについての本を読んでいることを忘れてしまいそうになります。そんなときに、話はきちんとラーメンに戻っていくという不思議な感覚を体験できました。

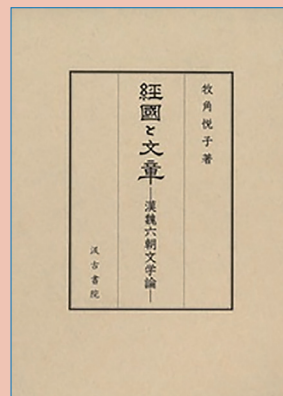
現在目にするラーメンにまで話が進んだあとは、落語家林家木久蔵（現・木久扇）さんとの談話などがあり、ラーメンと大衆文化にも触れられています。大変幅広い分野にわたって「ラーメン」を学べる1冊です。皆さんもこの本から、ラーメンの奥深さを味わってみませんか？

本学教職員著書紹介

『経国と文章

—漢魏六朝文学論—』

牧角悦子 著
(汲古書院 2018年6月14日発行)
377頁 10,000円+税
ISBN: 9784762966170
〔請求記号〕920.24-ME



中国の中世を「六朝（りくちょう）」と呼ぶ。この時代はいわゆる貴族文化が大きく花開く時期である。貴族といえば、お金と地位に任せて贅沢な暮らしを楽しむ有閑階層を想像するかもしれないが、それは近代における民主主義に毒された偏見である。中国における貴族とは、知識人であり官僚であり学者であり、そしてなによりも文化人であった。文化の洗練こそがその時代とその国の文明の尺度だとすれば、それを極度にまで高めた六朝時代は、中国が文化の質を最高度に極めた時代だったと言ってよい。宗教も哲学も芸術も、緻密で洗練度の高い体系性をこの時代に獲得する。王羲之の書を生み出し、顧愷之の画を生み出し、老荘哲学という形而上学を生んだ六朝は、また文学というものが、独自の価値を獲得していった時代でもあったのだ。

本書では、中国古典における「文」というものが、近代的意味での「文学」とは異なることを確認した上で、社会的・現実的価値を中心に据えた古典的「文」が、表現することの自律的価値に目覚めるのが、この六朝期であることを論じた。「経国と文章」という言葉は、建安の三曹の一人である曹丕の『典論』『論文』に見える。文論の開始とされ、日本でも貴族の文壇に大きな影響を与えた。建安はまた、近代になって魯迅が「文学自覚の時代」と呼んだことから分かるように、文学史の大きな画期でもあった。ただ、「経国と文章」は、「政治と文学」と同義ではない。文学と政治とが対立的に捉えられる近代的視点とは異なる古典世界において、「文」の持つ意義を中心に据えつつも、そこから立ち上がる文学意識を跡付ける試みを本書では行った。

これまで手がけた幾つかの専著と異なり、本書は中国古典の、特に中世の儒教文化を論じた学術書である。学生・院生の皆さんには分かりにくい前提や筆者の視点の独自性（新説満載の自負有り！）などがある。たくさんの人に広く読んでいただきたい、などとは思わないが、この分野に真剣に取り組もうとする意思のある方に、読んでいただければ嬉しい。

なお、本書は本学から出版助成金をいただいた。記して感謝申し上げたい。

(東アジア学術総合研究所長 牧角悦子)
文学部中国文学科 教授

編集後記

「季報」103号をお届けします。
ご執筆いただきました諸先生にまず厚く御礼申し上げます。

今号は、異国の研究についてご寄稿いただき、アメリカの図書館事情を紹介し、おススメの1冊も外国人が研究した日本文化に関する図書を選ぶなど、いつもより国際色のある「季報」となっております。

ぜひご一読ください。(S・A)

二松学舎大学附属図書館

季報

第103号

発行日 平成30(2018)年11月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話: 03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話: 04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話: 03-5227-8333